

やん 梁          みる 敏          ほ 鎬

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 287 号
学位授与年月日	平成20年11月13日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	外来語の受容に関する日韓対照研究
論文審査委員	(主査) 教授 小林 隆          教授 齋藤 倫明 教授 才田 いずみ 准教授 大木 一夫 准教授 甲田 直美

## 論文内容の要旨

### <序論>

序論では、本論文の目的と方法、及び外来語の概念設定について述べた。

本論文は、日本と韓国における外来語の受容について、両国の様々な資料や外来語の実態調査をもとに明らかにし、その異同について解き明かすことが大きな目的である。この目的を明らかにするため、次の4点を設ける。

- (1) 外来語の受容の背景を把握するため、日本と韓国の外来語の歴史と政策について概観する。
- (2) 外来語が多く使われている分野での外来語の選択状況や、外来語表記のバリエーションと外来語の定着との関係について把握する。
- (3) 外来語全体についての様々な意識を把握した上で、外来語の使用実態調査をもとに、個人の外来語の受容実態と言語内的・外的な要因との関係について明らかにする。
- (4) 外来語のイメージに着目して、日本と韓国の外来語の受容実態と意識との関係について明らかにする。

研究目的(1)を遂行するために、日韓における外来語の歴史と政策についての関連事項を集めて、年表化し、それをもとに通時的に記述する。

次に、研究目的(2)を行うために、「パソコン」と「スポーツ」関連用語を中心に、外来語の選択状

況について分析する。また、外来語表記のバリエーションと定着の関係を把握するため、日韓の新聞一面の外来語について調査して考察する。

最後に、研究目的(3)から(4)を明らかにするために、日韓で外来語の使用実態に関する大規模な調査を行い、外来語の使用実態と言語内的・外的要因、そして、外来語の受容と意識の関係について明らかにする。

本論文は、外来語の受容に関する日韓対照研究であり、社会言語学の研究分野からみて、「ことばの多様性」に焦点を当てている。特に、上記の研究目的(2)から(4)は、外来語の選択、表記、意識、言語内的・外的要因と受容実態の関連など日韓における外来語の多様性を把握するためのものである。ただし、このように「ことばの多様性」を理解するためには、研究目的(1)のような外来語の歴史的な背景や政策など「ことばをめぐる社会問題」についても研究する必要があると判断した。

また、本論文での外来語の概念について、日本と韓国の先行研究を踏まえて、新たな整理を行った。本論文で言う外来語には「西洋から入って来たことば」と「比較的新しいことば」という2つの条件が付いている。

まず、古くから日本と韓国に入ってきた漢語は勿論、東洋系の音訳借用語も除く。すなわち、西洋から入って来たことばに限定する。また、比較的新しいことばに限定する理由は、その条件をつけることによって、日韓における外来語の受容実態が見えてくると考えたからである。つまり、今まきに入ってきたばかりの外来語が、両国においてどのように受け入れられていくのか、その様子を目の当たりにすることができるからである。以上のように整理した外来語をもとに、4つの研究目的を設定し、外来語の受容に関する日本と韓国の対照研究を行った。

## <本論>

### 第1章 外来語の歴史と言語政策

第1章では、日本と韓国で外来語の受容に影響を与える可能性がある変数として外来語の歴史と言語政策の面に着目した。外来語の歴史を時代に沿って日本と韓国で分析した結果、次のようなことが明らかになった。

まず、日本の外来語の時代区分は、室町時代以降の日本史の時代区分と類似していて、大きく室町、江戸、明治以降の3つの時代に分けられる。そして、各時代区分には、キー言語が存在する。このキー言語とは、時代ごとに最も強い影響を与えた国の言語である。

一方、韓国は日本より西欧文物の吸収時期が遅く、受動的、間接的に外来語を受け入れたため、外来語の時代区分も短い。しかし、韓国の外来語の時代区分も日本と同じく朝鮮時代、植民地時代、大韓民国時代のように3つの時代に分けられる。韓国では朝鮮時代に、キー言語が存在しないことを除けば、時代ごとにキー言語が存在する。ただし、韓国の外来語の流入の歴史は、H文化(高文化)からL文化(低文化)への流れに加えて、20世紀初に入ってきた日本語のように、異質な言語が完全に韓国語を覆う形の征服による流れ方もある。

外来語の歴史の流れから考えて、日本は室町時代以降、外国との交流や接触が続けられ、現在に至るまで外国や外国語に対して寛大な態度を取ってきた。また、通時的に見て日本は、日本語の純粋性を求める国語政策より、「常用漢字表」「外来語の書き方」のように言語の標準化や表記法の整備の实体計画を多く打ち出してきた。

一方、韓国の外来語に対する受容態度は鎖国や植民地時代の影響で、19世紀末から20世紀の後半までは受動的かつ間接的な受容態度であった。このように20世紀の後半までは、国語醇化運動などの言語政

策により、抑制された受動的、間接的な受容態度が続いてきた。しかし、20世紀後半からは、日韓ともに英語早期教育に代表されるグローバル化が進み、若い世代を中心に外来語に対する意識と使用にも変化があらわれてきた。

## 第2章 外来語の選択状況

第2章では、日本と韓国の専門用語にあらわれる外来語の選択状況について、二国間でどれくらいの異同が見られるかについて考察した。

その結果、コンピューター用語の場合、日韓ともに、原語を漢語で翻訳借用したパターンが一番多かった。次に、両国ともに原語をそのまま音訳借用する外来語のパターンが多かった。これらのパターンが両国で共通している点で、全体の3割を超えていた。一方、日韓で外来語の選択状況が異なっているパターン、すなわち異語種のパターンを見ると、圧倒的に多いのは、日本では外来語、韓国では漢語の組み合わせであった。これは、日本の方が韓国より外来語を借用することに積極的であることを意味するものと考えられる。

また、オリンピック用語の場合、日韓ともに外来語を用いるパターンが一番多く、次に漢語での翻訳借用のパターンが多かった。一方、日韓で異なる用語選択をした異語種のパターンを見ると、圧倒的に日本で外来語、韓国で漢語の組み合わせであった。これは、先に述べたコンピューター用語に見られる二国間の傾向と一致している。ただし、オリンピック用語では、朝日新聞の例をとおして、翻訳借用の漢語から外来語へ移行することが見えてきたと言える。

例えば、戦前に使われてきた「籠球」「漕艇」のような漢語が、戦後の日本では、「バスケットボール」「ボート」のように変わっていた。これらが漢語から外来語に変わった理由は、戦後の日本の社会に起きた西洋化などの変化があったからであろう。一方、韓国は戦後の日本が変えた多くの漢語種目名を維持していた。ただし、近年、戦後の日本に起きた漢語から外来語への変化が韓国でも起きようとしている。例えば、「권투 (拳闘)」「철인 3종 (鉄人3種)」は「복싱 (ボクシング)」「트라이애슬론 (トライアスロン)」に変わってきている。今後、戦後日本で起きた変化が、遅れて韓国でたて続けに起こるのかどうか、観察する必要がある。

## 第3章 外来語の表記と定着の関係

第3章では、日本の朝日新聞と韓国の東亜日報を用いて、一面にあらわれた外来語表記のバリエーションを分析し、外来語の定着との関係について考えてみた。そして、外来語表記のバリエーションが外来語の定着の段階を示しているという仮説を提示した。

まず、両国の新聞にあらわれる外来語表記の全体的な特徴は、表記が外来語のまま、すなわち注釈や説明なしの単独であらわれる単用のパターンが多く見られた。これは、少なくとも新聞にあらわれる多くの外来語が、ある程度、国民の間で馴染まれている語であり、説明と注釈の補助装置が要らないからである。また、括弧付き併記のパターンを見ると、両国でアルファベット頭文字による表記が多く見られた。これは、近年、入ってくる外来語の特徴かもしれないが、原語が予測しにくい外来語が新聞によく登場するためであると考えられる。

外来語表記のバリエーションが外来語の定着の段階を示しているという仮説をもとに、外来語の表記と定着の関係をモデル化した。

まず、定着しきった外来語は、人々に馴染みの深い外来語が多く含まれていて、注釈がついてない単用表記は、認知・理解・使用率も高いグループであった。逆に、まだ定着していない外来語は、注釈な

どが付いている併記表記が多く、その上、認知、理解、使用率も極めて低いグループであった。

また、定着しきった外来語とまだ定着していない外来語の中間に位置する語は、定着に向かう外来語で、認知、理解、使用率などが上れば、定着に向かうだろう。つまり、定着が進むことで、表記も単純化され、使用も増え、さらに定着につながると考えられる。

#### 第4章 外来語をめぐる意識

第4章では、外来語をめぐる意識について、外来語そのものに関する意識と規範意識に分けて考察した。

外来語そのものに関する意識は、「外来語の使用」「外来語の使用の変化」「普段の生活での外来語の使用」「外来語が分からなくて困った経験」「分からない外来語が多い分野」「外来語を進んで取り入れる職種」「外来語使うことの良い点と悪い点」のように、外来語の使用から外来語の長所と短所に至るまで、今使われている外来語の現状に関する意識を、使用度によって調べた。

その結果、基本的に両国ともに、高外来語使用者は、低外来語使用者に比べて、外来語が多く使われており、以前に比べて外来語使用も増えていると答えた。つまり、外来語を使う人ほど、外来語が多く使われていると認識していると言えるだろう。外来語が分からなくて困った経験については、日本は低外来語使用者から高外来語使用者になるにつれて、外来語が分からなくて困った経験が少なくなるのに対し、韓国は低外来語使用者と高外来語使用者が、中外来語使用者より外来語が分からなくて困った経験が多かった。これは、日本では外来語をたくさん使うほど、外来語が分からなくて困った経験が軽減されていくが、韓国では中程度の使用段階において、外来語が分からなくて困ることに対する認識が弱まるためだと考えられる。

また、分からない外来語がたくさん使われている分野として、両国で「コンピューター関連用語」「経済用語」「ファッション用語や化粧品名」が上位にあがった。しかし、外来語の使用度と分野間の関連性はみられなかった。

次に、外来語を進んで取り入れている職種について、日韓で共通して「広告業界」の回答が多く、「企業」の場合は日本と韓国で差が見られた。「企業」で日韓の差が見られたのは、日本は昔から企業のイメージをアップさせるため、外来語をたくさん取り入れているためだと思われる。さらに、外来語を使うことの良い点では「自国語ではいえない微妙な意味合いが出せる」と答えた人が両国で約50%を超えていて、日韓で高外来語使用者ほど微妙な意味合いを出せると答えた人が多かった。一方、外来語に対する悪い点については日本と韓国のグループ間で相反した結果が見られた。

外来語の言い換えへの志向意識については、日本より韓国の方が言い換え志向が強かった。その理由は、韓国では言語政策的な面で、日本より言い換えが活発化しており、それが国民全体に広がっているためであろう。このような動きから韓国では積極的に言い換えたほうがよいと認識しているものと考えられる。中でも、それほど大きな差ではないが、韓国では低外来語使用者ほど言い換えたほうがよいと答えており、日本では低外来語使用者よりも高外来語使用者の方が言い換えたほうがよいという意識があらわれた。以上の結果、外来語の使用度によって、外来語をめぐる意識が日韓で同じになったり異なったりすることが確認できた。

#### 第5章 外来語の使用実態と言語外的要因

第5章では、日本と韓国における外来語の使用実態と言語外的な要因との関係について記述した。

両国間の調査時期や調査対象者の偏りがあり、日韓の直接比較は不可能であるものの、それぞれの国について述べた外来語の使用実態の結果をもとに考察することができた。そこで、両国で明らかになっ

た結果にもとづいて、外来語の使用実態に関する共通点と相違点について述べる。

まず、両国の外来語の使用実態に関する共通点は、日本と韓国ともに認知と理解、認知と使用においては認知率が優勢な点である。この認知と理解、認知と使用の間でギャップが生じ、描かれる散布図の様子は三日月形となった。また、理解と使用においても理解が優勢であったが、その差は微細であり、散布図の対角線に近い位置に並ぶことは、理解と使用が比例していることを意味する。

また、外来語の受容に影響が大きいと予想される言語外的要因（調査対象者の属性）という観点からは、日本と韓国の間で細かい数値の変動はあるものの、男性で若い世代という属性群は早い受容者であり、女性で高年層という属性群は遅い受容者であることが明らかになった。社会的活躍層であり、活動領域の広い男性において、外来語が多用されることが確認できた。

一方、外来語の使用実態に関する両国の相違点については、外来語の理解と使用の関係が日本より韓国で非常に強いことが確認できた。

また、日本と韓国で異なる属性に関して述べると、日本では都市規模という属性を取り入れたが、都市規模の大きさによって、外来語の使用実態が異なることが確認できた。さらに、韓国の場合、海外滞在経験の有無という属性を取り入れ、海外への直接経験が外来語の使用実態に影響していることがこの調査で分かった。

以上のように、調査対象者の属性は、外来語の認知率、理解率そして使用率に影響を与え、外来語の受容と定着の過程に重要な要因として働くことが明らかになった。

## 第6章 外来語の使用実態と言語内的要因

第6章では、第5章で扱ったデータの中から日韓で共通する属性である学生に絞って、外来語の使用実態と言語内的要因、すなわち外来語の意味分野との関係について対照研究を試みた。

その結果、外来語の認知、理解、使用には両国間で差が見られ、それぞれの国で、認知、理解、使用率の高い語が違うことが分かった。このような差は日本と韓国の社会的に広まっている語が異なるためであろう。また、外来語の認知、理解、使用率のそれぞれの関係については両国間で異同が見られた。両国の共通点として、認知と使用の関係より、理解と使用の関係が密接であることが分かった。一方、両国の相違点は、日本より韓国の方が理解と使用の関係が非常に近く、外来語を理解した場合、韓国では使用への移行が非常に早いということである。

次に、外来語の使用実態と言語内的要因との関係について明らかになった点は以下のとおりである。すなわち、両国とも語の分野によって外来語の使用実態は異なり、実生活に密接した「経済産業」や「情報」の分野は外来語の受け入れが早く、実生活から少し離れている「経営」と「行政」の分野は外来語の受け入れが遅い。

## 第7章 外来語の受容とイメージ

第7章では、これまであまり研究されてない外来語のイメージに着目した。それにより、外来語の受容実態と意識の関係について明らかにすることができた。

まず、外来語に対して日韓で共通のプラスイメージとしては、「実用的」というイメージが意識され、マイナスイメージでは、「親しみにくい」というイメージが両国で優先的に意識されることが分かった。

このように外来語のプラスとマイナスのイメージを把握した上で、外来語の受容度によってどのようにイメージの変化が起きるのかを調べるため、受容度を高外来語使用者と低外来語使用者のグループに分けて分析した。その結果、外来語使用度の増加（低外来語使用者から高外来語使用者への移行）によっ

て、イメージ評価語の変化があらわれた。

日本は外来語を使えば使うほど、プラスイメージは失われ、逆にマイナスイメージは強くなっていた。一方、韓国は外来語を使えば使うほど、プラスイメージは維持される、もしくは強くなり、逆にマイナスイメージは薄まっていた。

このように日本と韓国でイメージ変化が起こった理由として、次のようなことが考えられる。日本は韓国に比べ、古くから外来語を受け入れてきたので、外来語に対する新鮮な印象は弱くなっている。一方、日本より外来語の受け入れが遅かった韓国にとっては、外来語に慣れておらず、新鮮な感覚として外来語に接していると考えられる。つまり、日本の場合、外来語が持つ新鮮さや目新しさという印象がなくなり、特殊なものでなく、一般的なものとして認識されるようになっていく。それに対して韓国では、初期段階の外来語の印象を保っていて、新鮮さや目新しさによるイメージの変化が外来語の使用の度合いという変数によって変わる。外来語のイメージの変化にも「新鮮さ通減の法則」のようなものがあり、日本では、この外来語の「新鮮さ通減の法則」が進んでいる状況であるが、韓国ではまだ新鮮さ通減が進んでいないと思われる。

## <結論>

本論文の目的は、日本と韓国における外来語の受容について、両国の様々な資料や外来語の実態調査をもとに明らかにすることであった。

本論文では、対照研究という観点を取り入れることによって、従来の外来語の研究を克服し、二国間の外来語の受容に関する異同を捉えようとした。日本でも、韓国でも、外来語研究は独自に研究が行われてきた。しかし、外来語とは、他の国との言語接触によるもので、言語学的な性質などを把握するためには、対照研究が望ましい。例えば、日本国内で外来語の受容を明らかにする際には、どうしても表面的になりがちであったが、日本と異なる社会的背景を持つ韓国と比較することによって、外来語を客観的に捉えることができる。したがって、日本と韓国の個別的な外来語の研究より、外来語の受容という事象を説明するためには対照研究が有効であったと考えている。また、日本と韓国で様々な資料や調査を用いて考察することによって、外来語の受容について広く、多角的に捉えることができたと考えている。

本論文の主演である外来語は、「西洋から入って来た比較的新しいことば」に限定することで、今まさに日本と韓国に受容されつつある外来語を観察し、従来の外来語の研究から見えなかった新しい結果を得ることができたと思う。

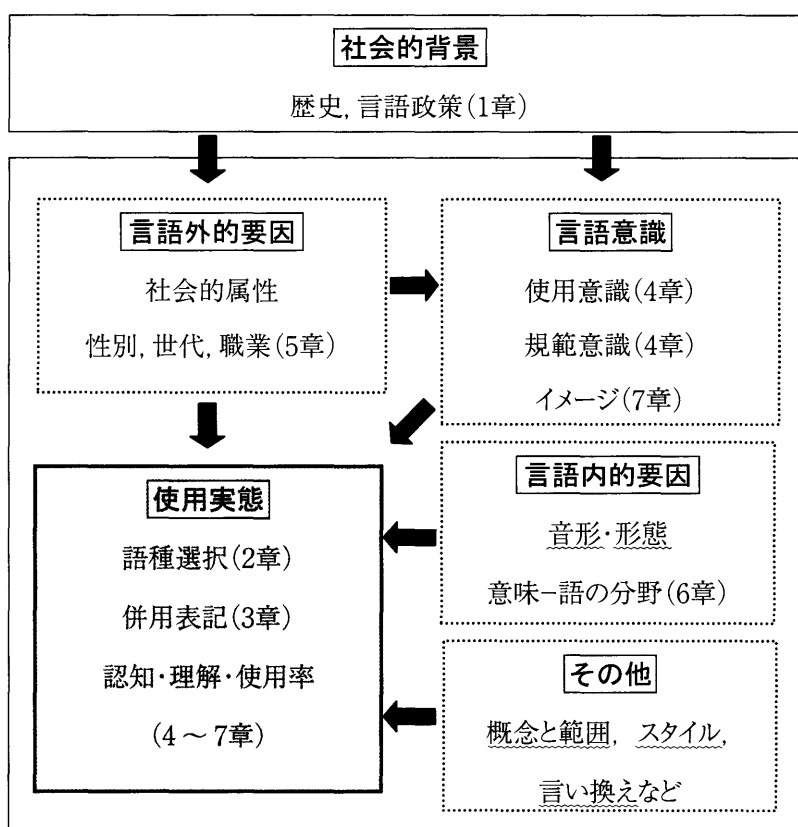
従来の研究結果は、日本が韓国より外国に対して開かれた態度をとっていたため、外来語の認知、理解、使用率が高いというものであった。しかし、今回の調査では、閉ざされた態度をとっていたはずの韓国の方が日本より外来語の認知、理解、使用率、すべてで高くなったことが分かった。これは、両国で外来語に対する意識と態度の変化が起こりつつあることの反映と考えられる。

第1章の社会的背景から考えてみると、日本は室町時代以降、外国との交流や接触が続けられ、現在に至るまで外国や外国語に対して寛大な態度を取っていた。一方、韓国は、外来語に対する受容態度は鎖国や植民地時代の影響、加えて国語醇化運動などの言語政策により19世紀末から20世紀の後半までは消極的な受け入れ方や受動的かつ間接的な受容態度であった。しかし、最近では、日韓ともに英語早期教育に代表されるグローバル化が進み、若い世代を中心に外来語に対する意識、さらに使用にも変化が生じてきたと考えられる。このような意識と態度の変化が外来語の受容に反映されたと思われる。ここで、面白いのは、日本より韓国が非常に早いスピードで外来語を摂取していくことが調査の結果をとおして読み取ることができた点である。これは、前述したように、外来語を比較的新しいことばに限定したた

めに見えてきた新たな成果であろう。今まさに入ってきて、日本と韓国で氾濫しているような様々な分野の外来語を研究することで、それが両国において、どのように受け入れられていくのかを目の当たりにすることができた。つまり、まさに動いている比較的新しいことばを観察することができたと言えるだろう。

以上のような点が従来の外来語の研究より、一歩前進した部分ではないかと考えられる。しかし、本論文であまり触れなかった部分と考察ができなかった部分も少なからず存在する。そこで、日本と韓国における外来語の受容について、本論文で、明らかになった部分と今後の課題として残った部分を次の図1を用いて説明する。

図1を見ると外来語の研究分野は多岐に渡ることが分かる。そのうち、本論文で各章ごとに扱った範囲との対応関係を示す。



<図1> 本論文の成果と課題

第1章の外来語の歴史と言語政策で述べた社会的背景は、日本と韓国での対照研究の有効性を示している。前述したように日本と韓国では、社会的背景が異なる。したがって、両国の社会的背景の違いで、外来語の受容にどのような差があらわれるのかを比較することができた。

日本と韓国の社会的背景が言語外的要因と言語意識に影響を与えていて、さらに、言語外的要因が言語意識の背景にある。そして、それらが外来語の受容の一つのあらわれ方として、外来語の使用実態（第4章～第7章）に集約する。また、第2章の外来語の選択と第3章の外来語の表記も日本と韓国であらわれる外来語の現状を示しているものであるため、外来語の使用実態としてくくった。なお、言語内的要因なども外来語の使用実態とつながっている。このように、第1章から第7章にかけて扱った社会的背景をはじめ、言語意識、言語内的・外的要因などは外来語の使用実態に影響を与える。

しかし、本論文で触れることができなかつた部分については波線を引いた。まず、言語内的要因の中では外来語の音形と形態の問題がある。また、その他の研究分野として、東洋系の音韻借用語を外来語の範疇に入れるかどうかという外来語の概念と範囲の問題、話しことばとしての外来語と書きことばとしての外来語というスタイルの問題、さらに、外来語の言い換え問題などである。このように、外来語の受容については、様々な研究課題が山積していることが確認できた。

本論文をとおして、見通しのついた結果に関しては、さらに詳しい分析を行っていききたい。また、本論文で触れることができなかつた研究領域に関しては今後二期すところの課題としたい。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、日本と韓国における外来語の受容のあり方とその違いについて、両国での実態調査をもとに明らかにしたものである。全体は大きく序論・本論・結論の3部から構成される。

「序論」では、本論文の目的と方法、および、外来語の概念設定について述べる。

「本論」の第1章「外来語の歴史と言語政策」では、両国の言語政策に注目し、外国語に対して寛大に接してきた日本と、純粹性を求める国語政策を打ち出してきた韓国との相違を明らかにする。

第2章「外来語の選択状況」では、コンピューター用語、スポーツ用語といった専門用語に現れる外来語の選択状況について考察し、韓国では漢語に置き換える傾向が強いものに対して、日本では外来語のかたちで受容する傾向が強いことを明らかにする。

第3章「外来語の表記と定着の関係」では、日本の朝日新聞と韓国の東亜日報を用いて外来語表記のバリエーションを分析し、外来語の定着度との関係について検討する。そして、外来語表記のバリエーションが外来語の定着の段階を反映しているという仮説を提示する。

第4章「外来語をめぐる意識」では、外来語使用者の意識についてさまざまな角度から分析し、外来語の言い換え志向は日本より韓国の方が強いこと、および、その背景として、言語政策的な面での言い換え意識が国民全体に浸透していることが挙げられることなどを指摘する。

第5章「外来語の使用実態と言語外的要因」では、外来語の使用実態と言語外的な要因との関係について記述し、男性かつ若い世代という属性群が外来語の早い受容者であり、女性で高年齢という属性群が遅い受容者であることなどを明らかにする。

第6章「外来語の使用実態と言語内的要因」では、外来語の意味分野と受容との関係について検討し、両国とも、一般人の生活に密接した「経済産業」や「情報」の分野は外来語の受け容れが早く、そうでない「経営」や「行政」の分野は外来語の受け容れが遅いことを明らかにする。

第7章「外来語の受容とイメージ」では、外来語の使用度とイメージとの関係について検討する。その結果、日本は外来語使用の増加とともにマイナスイメージが強くなるものに対して、韓国は逆にプラスイメージの維持・強化が見られ、そこには外来語受容の歴史が関係することを指摘する。

「結論」では、本論文の成果をまとめ、今後の課題について述べる。

外来語の受容に関しては、これまで近代を中心に研究がなされ、また、現代まで視野に入れたものでも個別の事例研究にとどまるものが多かった。それに対して、本論文は、今まさに展開しつつある外来語の動態に注目し、現代的な問題点を把握した上で、さまざまな角度から外来語の受容のあり方を解明しており、社会言語学・対照言語学の立場からのアプローチとして高く評価される。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。